

周恩来さま後の中国は走資派批判が急速に高まってきたわけだが、今回の事態を予測させるような事件はすでに一月十九日にも起こっている。周恩来の葬儀は一月十五日に行われたが、この時も民衆の花輪が全国から天安門前広場に寄せられた。その花輪が一月十九日を期して人民解放軍に撤去されたことを、私は確実な情報として聞いている。これは、周恩来を追悼する大衆の自然発生的な動きを思わしくなく感じている現在の党中央、いわゆる文革派が北京を守る衛士(砲)兵にやらせたものだ。今度の事件は、それが大衆を巻き込んで暴発したといえるよう。

走資派批判というのは文革派が周さまと急激に起したものだ。それを見ていると文革派のあせり、危機意識を感じる。

それをもたらしした原因は、周恩来の葬儀で鄧小平が弔辞を読んだことに象徴的に表れている。冠婚葬祭を重んじる中国であり、しかも弔辞の内容は文革時の周前首相については非常に抽象的に述べられるなど大きな問題をほらんでいる。これを聞いた文革派が危機意識を抱いたのは当然と思われる。

このいきさつからいけば、鄧小平はすでに首相になっているのが普通だが、批判、抵抗が出てきたわけだ。しかし、一般大衆からすれば、文革以後も続いた批判、水滸伝批判、そして今度の走資派……と批判の繰り返して「これではたまらない」といった気持ち強いのではないか。そのことと、もうひとつ見逃せないのは外電が報じている江青女史に対する強い批判だ。中国では、もともと女性が政治に口をききしはきむことと強く反発する風潮があり、それが文革派批判を重ねて江青女史を矢面に引き出したといえると思う。

一方、日本の新聞だと、中国では走資派に強い批判が集まり、鄧小平が失脚寸前のように報じてきたが、私はこの間「そうではな」と主張してきた。むしろ、走資派の方が潜在的基盤がある。このことを逆に見ると、走資派批判を展開してきたのは北京大学や清華大学という大学や、大衆油

うのが民衆の感情だ。走資派批判の高まりは「反面教師」として、むしろ走資派の言い分に対する支持を広げ、同派の潜在的基盤を拡大させているものと思う。

いま北京で何が？

文革派に危機意識

潜在的基盤強める走資派

性もある。党中央はこれを「反革命」と規定しているが、五日の事件はあれで収まったとしても、そのしこりは毛主席さま後の中国への歴史的移行期の中で、大衆は混乱と内部の深刻な亀裂を抱えている。

いずれにしろ、いわゆる走資派に対する大衆の基盤は意外に強く、逆に毛主席周辺、側近に対する反感が意外に根強いといえる。毛主席は走資派を批判すると同時に、周恩来路線をも批判しているところを考えていたわけだが、今度の花輪撤去事件をきっかけに中国の民衆もようやくその辺の事情がわかってきたものと思う。むしろ、鄧小平、周恩来を擁護する形が、江青女史を表に引き出すというあてつけがましい形となって表れ、と理解できる。前にも述べた



中嶋 嶺雄

ように、江青には政治に関与し過ぎるという批判が強く、毛主席に粉骨砕心尽くすという国家的立場に立って政治を行った周前首相と際立った対照を見せている。こうしたことが文革派は権力志向一と、大衆に思われており、毛主席に対する敬愛は委わらないにせよ、事件は毛沢東政治の持つ家父長体制に対する大衆の拒否権発動といえる。

である。第一に「走資派」というのは批判する側のレッテルであって、中国の民衆にとって鄧小平なり周恩来が走資派として真に批判の対象であるかということまではないとと思う。そうした批判の繰り返しの間からも走資派批判に対する抵抗が暴動となって次々に起きる可

田、農業基地大築、軍では瀋陽部隊といいたいすれも文革派のモデル地区であり、全国的な生産点までおろしていない感じがする。今度の騒動はそのことを裏付けるものであり、こうなると大衆の間からも走資派批判に対する抵抗が暴動となって次々に起きる可

今後の中国政局の予測はむずかしいが、今度の事件に対して鄧小平たちがどういう対応をとるか。騒動が全国に広がるかどうかは別として、走資派批判がむすかしくなるのは確かだろう。毛主席の死が時間の問題とされているおりに、今度の事件は文革以上に衝撃的である。

(談・東京外語大助教)